



## エッセイの思い出

Reminiscence of Essay

笠倉 忠夫

Tadao Kasakura

EICA 名誉会員

学会からエッセイ執筆の依頼を受けて、始めに浮かんだのはエッセイについての思い出です。

私は大学在職中、よく図書館に通いましたが、そこで感じた印象は大学の先生方は殆ど図書館を利用されていないということでした。殆どの先生方は必要な専門分野の文献は自室に常備し、最先端の研究情報は学会や学会誌を通して入手し得るので、悠長に図書館通いなぞ必要ないのでしょうか。それに引き換え、何の準備もなく大学に飛び込んでしまった私は、専門の基礎（例えば基礎量子力学）や定義も未だ定かでないエコロジー工学の基礎の授業をしようとするれば、必然的に図書館に頼らざるを得ません。尤もそのお陰で、図書館で Encyclopedia Britannica から ecology という言葉の由来が、“1866年、ドイツ、イェーナ大学のヘッケル教授が自分の専門分野に対して、ギリシア語 oikos (E: house, environment) から Oekologie という学術用語を作った”ということにあることを知りました。

このような図書館通いの中で私にとって最も印象深かった出来事は、図書館の蔵書目録の中に蔵書番号 0761 として、C. Lamb; “Essays of Elia, Last Essays of Elia” があったことです。書架に収められて以来、誰にも触れられたことも無かったその本を手にした時、私は何とも言えない懐かしさを覚えました。私達の時代の風潮だったのでしょいか、高校高学年或いは大学の教養課程で Essays of Elia が教材に用いられ、私もそれを読まされました。遠い記憶の中から懐かしい思い出が蘇ったのです。

Lamb の英語は高校生でも十分読むことは出来ます。しかし、山内義雄（「エリア随筆抄」、みすず書房、2002）は「エリア随筆は天下の絶品、随筆の華と折り紙つきのものではあるが、……もともと葉味にやかましいこの料理人の手の込んだ料理の味をかみわけるとはなみたいていのことではない」と評しています。ではその様な書籍がどのような経緯で、訳本で無く原文のまま工学系の単科大学の図書館に蔵書されたのでしょうか。学部一、二年の教養英語を担当した先生が参考書籍として選んだのか、大学創設時に見識の高い図書館司書が選定したのか、それは分かりません。ただ、私にとっては青春時代に格闘した C. Lamb の Essays of Elia に大学の図書館で出会えたことが大変懐かしく、楽しい思い出となりました。

本文を書くに当たって、Lamb を学んだ時の参考書：「THE ESSAYS OF ELIA エリア随筆集」、研究社、昭和 28 年版を引っ張り出して幾編かを読み返してみました。勿論、読んだのは対訳のほうです。

やはり Lamb のエッセイは英語を読むことは出来ても、ヨーロッパにおけるエッセイの極みと言われるだけあって、その面白味や内容を理解するには訳注を参照しても大変難しいことを改めて思い知らされました。

ところで、「エッセイ」という言葉を辞書で引いてみると、例えば、新村出編「広辞苑」第四版、岩波書店にはエッセイではなく「エッセー (essai 仏, essay 英)」としてフランス語読みで記載されています。エッセー又はエセーという表記は他にも多く見られますが、ヨーロッパにおけるエッセイの嚆矢がフランスの M. E. de Montaigne; “Les Essais” (1580) であったことに由来するように思われます。この書は日本では「随想録」と訳されていますが（近年では「エセー」と訳す方が一般的）、フランス的精神の源泉そのものとなったと評されています。そしてこの形式をイギリスに持ち込んだのが、F. Bacon で、彼も “Essays” (1597) を表しています。以後エッセイはイギリスで発展し、Lamb の “Essays of Elia” に至ってその絶頂に達したと言われているのです。

このように見てくると、エッセイという文学形式はヨーロッパに特有のものであったように思われますが、良く考えてみると我が国の古典文学の中にもエッセイに類似の古典があります。清少納言；「枕草子」(1000 年前後)、鴨長明；「方丈記」(1212 年)、吉田兼好；「徒然草」(1310 年)などは、形式、内容などから言って、ヨーロッパのエッセイに大変良く似ています。例えば、徒然草の序段：つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて……は將にエッセイのころを述べていると言っても差し支えないでしょう。現に、西尾実は“徒然草の面白さはモンテニユの「エセー」に似ている”と言っています。東西で思考の道筋、感性の表現等の違いはあっても、ころは同じなのでしょう。文化的交流が無くとも、人間 (Homo sapiens) という種は洋の東西を問わず、エッセイのような共通した精神的営為を行うものだというところをつくづく思い知らされました。